



「あ、この仏像は脱乾ですね」「脱乾って、何ですか」

このやりとりからすべてが始まった。今から10年ほど前。墓参りの男性は、本堂に入るなり、須弥壇上の本尊さんに視線を集中させた。

自坊・曹洞宗真国寺は、初代富山藩主の前田利次公以下の12代までの藩主の廟所をまもる寺。その本尊さんについて、住職の私はその時まで何も知らなかった。そして、仏像探求の奮闘が始まった。

まず分かったことは、「脱乾」とは「脱活乾漆像」の略で、麻布と漆で造られた仏像を言う。内部が空洞であるために軽く、火災な

釈迦如来像

永田 円了
真国寺住職



1949年、富山市生まれ。大卒卒業後、5年間の米国留学を経て、03年まで富山国際大教授。80年から富山藩主前田公の廟所・曹洞宗真国寺19代住職を務めるかわら、大学退職後は県内外で多数の講演会をこなす。

どの災害時に運びやすく、今まで何百年も生き残ってきたものと推測される。脱活乾漆像として国内

で有名なのは、奈良・興福寺の阿修羅像や、同・唐招提寺の鑑真和上坐像などがある。みな国宝である。

「もしやこの本尊さまが!」。持ち前の好奇心がぐいと頭をもたげてきた。すぐに写真を撮り、奈良国立博物館に送ってみるが、相手にされなかった。そこでプロカメラマンに依頼して鑑定用の写真

を用意し、近くの医院の協力を得てレントゲン写真も撮った。

資料を仏師の西村公朝氏に送った。後日、西村氏から返事があり、「釈迦如来像」であることが分かった。その後、東京芸大・奈良古美術研究施設の科学鑑定で、12世紀ごろの中国・宋代の仏像であることも判明した。

よく見ると、仏像は右手に豆のようなものを持っている。マンゴーの実だった。西村氏の解釈によると、物語は2500年前のイン

ド。托鉢を終えた釈尊に、他宗の輩がマンゴーの実を献じた。当時のインドでは、仏教は新興宗教の一派で、その度量を試そうと既存の宗教教団が挑んできたのである。一般的に宗教教団というものは排他的で、教義の対立で血なまぐさい争いが絶えない。

で、一体釈尊はどうしたのか。他宗が献じたマンゴーの実を受け取って、他者を受け入れる寛容な姿勢を示したのである。宗派を越え、万人を受け入れる仏教の姿を、12世紀の中国で造られたこの仏像の右手が、物語っていた。

マンゴーについての探求は続く。マンゴーは千個の花が咲いても、1個ぐらしか実を結ばない。宗教心をもつ人は多いが、悟りに至る難しさの例えとされるところ(岩佐俊吉著『熱帯の果物誌』より)。2500年前のマンゴーの実に込められたメッセージが、真国寺の脱活乾漆像に甦る。

手のマンゴーが物語る